

# 和散人の徒然新し



金田和友

## 第一話

芳彦和尚の独り言 から

何か非難めいたことを、対等もしくは自分より目下の人に言われた時、人はそのまま「ごめんなさい。これから気をつけます」とはなかなか言えない。せめて一矢（いっし）報わんと、言う台詞（せりふ）が

「お前だってそうじゃないか！人のこと言えた義理か！」

しかし、こうなると、悪の連鎖である。報復合戦である。貶（けな）し合いである。お互い針の筈（むしろ）である。

「お前だってそうじゃないか」――これは、本当は自分に言うとう絶大なご利益（ごりやく）があると思う。

誰かを非難したい時。なんだっていいのだ。

「少しは部屋の掃除くらいしろよ」

「ご飯は残さず食べなさい」

「早く寝なさい」

「だらしない格好しないで」

「愚痴なんか言うのやめろ」

.....こうやって人のことを非難したくなったら、まず自分に言うのだ。

「自分だってそうじゃないか。とほほほほ」

これで人のことを非難しないで済む。悪の連鎖や、後味の悪い思いをしなくて済む。

私は10のうち8は、こうして黙ることになる。だから口数が少ないといわれるのだ。ぐははは。

もちろん、本当に相手のためになのことがら、言ってあげるべき。ただし、優しくね、ユーモアで包んでね、後からじっくり効いてくるようにね！

## 第二話

### 良き友は宝です

「真の宝は、お金では買えない」とはがばい婆ちゃんのお言葉です。

私もお金では買えないいくつもの宝を持っています。

その一つが横浜在住の友です。

小学校以来60年、変わらぬ友情を交わし続けていてくれる有難い友人です。彼は横浜市の歯科医師会長を長年に亘り務め、今も現役で診療を続けています。彼からは物心両面で幾度も支援を受けたことがあり、私にとって、いうなれば「足を向けて寝ては罰が当たる」ほどの存在です。彼との交友の一端を記しますと.....

- ・ 現役時代のこと、不況のさ中人員整理の労使交渉の責任者だった時、交際費も無くて組合幹部との触れ合いに不自由な思いをしていたら、「出世払いでこれを使え」と言って資金を回してくれました。あの頃を思うと、今でも涙がこぼれます。
- ・ 彼は人一倍同窓生思いで、今も月一回株主優待券を活用して映画鑑賞会を主催し、現役を退いたシニアの憩いの場を提供して呉れるのです。毎回同郷の10数人の仲間が有楽町に集まり、心を暖めあい且癒しあっています。
- ・ 桜木町まで赴けばいつでも歯のクリニックをやってくれ、そのあと彼の馴染みの焼き鳥屋でご馳走になりますが、彼に云わせれば「朋来自遠方...で、お蔭で俺が楽しいんだ」と。(私は夫婦でお世話になっています)
- ・ 最近飲むと“同窓生の「老後の溜り場」になるようなおでん屋を都心のガード下に作りたい。資金は自分が出す。うまくいっても、失敗しても揉め事にならないようにしたいから今月は私の宝物を紹介しました。

持つべきは 良き友がきぞ そは宝

禿げ頭 有楽町で 会いましょう

### 第三話

ライの改善はペナルティー

ゴルフはティーショット以外は“そのまま打つ”というルールです。

民主主義の政権交代時もそうかと思っていたら、どっこい民主党はダム建設は中止する、基地の移転の約束は反故にする、「仕分け」で百年の計まで中止する等とライの改善まがいの改革を始めました。たとえ政敵時代に決定したこととはいえ、革命政権ならいざ知らず、議会政治の国家にあって国と国が合意したことや、国民の同意を得たことまで覆すことが、果たして許されているものかと、世の成り行きを見守っている昨今です。

話は変わりますが、ニュージーランドの入国審査で靴や杖などが厳しくチェックされますが、当地に旅をしてその訳がよく分かりました。

## 第四話

### 私の五七五

万句詠めば 中に白眉の 一句かな

俳句歴十余年の私の俳句は世にいう「無季俳句」で、季語、切れ字、字余りなどは一切無頓着、印象的な事象にであつたら、すかさず五七五にしてメモするというやり方で、多作にして駄作の山を築いてきました。そもそものきっかけは仲間と秩父三十四観音巡りをしているときに古寺の境内で好物の茗荷を失敬して「南無観音 茗荷頂戴 つかまつる」と詠んだのが好評で、以来関東百観音をお参りしながら紀行句をつくり続けることになりました。それが習慣となり、国内外の旅でも紀行句を綴ってきたので、今では古寺巡りとの句入り紀行文が三百編以上溜まりました。

高尚にして優雅な句を...と思うと窮屈ですが、何でも気楽に五七五にしてみようと考えたと誰にでもできるし、楽しくて便利なものです。

楽しいな 美人もブスも 五七五

いたらない 故に女の 持つ魅力

ほろ酔うて 芭蕉一茶 杜甫李白

いつの世も 元気は自分で 作るもの

俳句は感性を養い脳を活性化するのに抜群の効果があるといえます。

ご一緒に気楽に五七五はいかが？

(蛇足) 無駄なこと している人が 人らしい

## 第五話

足るを知る

関東古寺名刹巡りの途次、某寺

で頂いた会報に次の詩が掲載されていました。軽妙にして平易な作風から考えると、江戸期の高僧仙崖義梵の作のように思われます。水戸光圀公が寄贈された竜安寺の蹲の「吾唯知足」の4文字を想起しながら、凡愚の身には、こういう心境に至るまでに甚だ道遠しと思いつつ、繰り返し読みました。

お前はお前でちょうどよい  
顔も身体もちょうどよい  
姓も名前もちょうどよい  
品も富みも親も子も  
息子の嫁もまた孫も  
お前にとってちょうどよい  
幸も不幸も苦も楽も  
喜び悲しみちょうどよい  
これまで歩いた人生は  
悪くもなければ良くもない  
みんなお前にちょうどよい  
自慢も無ければ卑下もない  
上もなければ下もない  
そんなところがちょうどよい  
死ぬ日死ぬ時わからぬが  
わからぬところがちょうどよい  
仏とお前の二人連れ  
ちょうどよくないはずがない  
地獄、極楽どちらでも  
行ったところがちょうどよい  
これでよかった嬉しいと  
思う心がちょうどよい  
すべての恵みを授かって  
ちょうどよいのがちょうどよい  
お前はお前でちょうどよい

「以情説理」という教えがありますが、高僧の話は本当に聞きやすいと感服します。

人の世は 理屈じゃないよ 心だよ